平成１９年６月の解説（府県天気予報）

【６月の天候状況】

上旬前半は、梅雨前線が本州の南海上に停滞して南西諸島や九州南部地方では曇りや雨の日が続きましたが、そのほかの地方では高気圧に覆われて晴れの日が多くなりました。上旬後半は上空に冷たい空気を持った低気圧の影響で全国的に雨や曇りの日が多くなりました。中旬のはじめ頃は高気圧に覆われてほぼ全国的に晴れましたが、その後は梅雨前線の影響で西日本を中心に曇りや雨の日が多くなりました。

月を通しての日照時間は北日本と東日本の太平洋側で平年より多く、東日本の日本海側、西日本の太平洋側、南西諸島では平年並、西日本の日本海側では平年より少なくなりました。降水量は東日本の日本海側と南西諸島で平年より多く、その他の地方では平年より少なく、特に西日本では平年の 40%を下回った観測地点もありました。気温はほぼ全国的に平年より高く、特に北日本では多くの観測地点で平年より 2℃以上高くなりました。

【６月の検証結果】

17 時発表の天気予報で「降水の有無」の全国平均の適中率は明日予報が 81%で例年（注）と同じ、明後日予報が 78%と例年より 3 ポイント高くなりました。地方毎の適中率では、明日予報は中国、四国、九州北部地方で例年より 5 から 9 ポイント低く、東海地方で 5 ポイント、北陸地方で 7 ポイントそれぞれ例年より高くなりました。明後日予報は近畿地方で 6 ポイント、中国地方で 9 ポイントそれぞれ例年より低く、東北、関東甲信、北陸地方で例年より 7 から 11 ポイント高くなりました。明日の最高気温の予報誤差は多くの地方で例年を下回り、特に北海道、東北、九州南部地方では例年より 0.3℃小さく、全国平均は例年より 0.１℃小さい 1.9℃でした。また、最低気温の予報誤差も多くの地方で例年を下回り、特に北陸、中国、九州南部地方では例年より 0.3℃小さく、全国平均は例年より 0.１℃小さい 1.2℃でした。

（注）例年値は気象庁ＨＰ（予報精度検証）内「月毎の精度の例年値」を参照してください。

【６月の天気予報から】

6月9日から11日にかけて上空約5700m付近で－15℃以下の冷たい空気（寒気）が日本海から南下して本州中部を通り関東の東海上に進みました（図１）。このため大気の状態が非常に不安定となって、9、10日は全国的に広い範囲で大雨が降り、11日は関

東地方南部を中心に雨が降りました。

10 日夕方発表した東京地方の天気予報では 11 日（明日）の天気を「晴れ　朝晩曇り」と予報しました。これは上空の寒気の範囲が次第に狭くなるとともに、11 日には関東の南東海上に遠く離れる（図１）と予想し、東京地方では上空の寒気による大気の不安定な状態は解消すると判断したためです。

ところが上空の寒気は予想よりゆっくり北を進み 11 日 9 時は関東の南でした。このため雨雲が関東地方南部の沿岸に広がり(図２)、東京地方も１時間に 2㎜ 程度の雨が昼過ぎまで続きました。

上空の寒気を原因とする雨は正確な予想が難しい現象の１つです。それは雨の強さと範囲や時間帯が、上空の気温、地上付近の気温、湿度、風向・風速、地形などの微妙な違いに大きく左右されるからです。この事例のように、上空の寒気による大気の不安定な状態が解消しつつある状況では、降雨の恐れがなくなるタイミングを的確に予想することはさらに難しくなります。

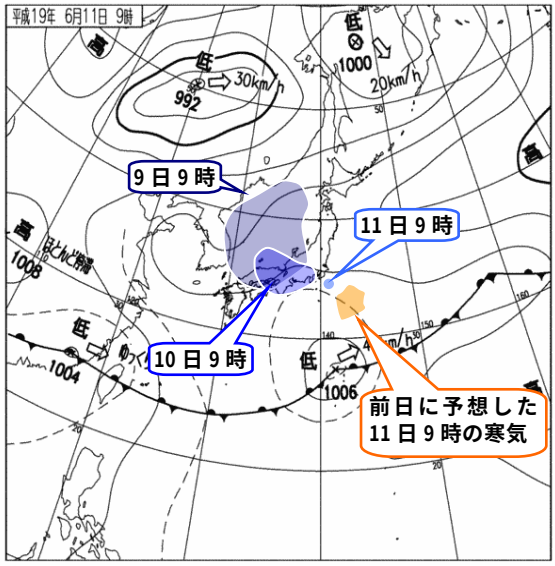

図１　6 月 11 日 9 時の地上天気図と 6 月 9 日から 11 日にかけての上空寒気の状況
青色：各時刻における 500hPa（高度約 5700m 付近）でﾏｲﾅｽ 15℃以下の範囲と寒気の中心
橙色：10 日に予想した 11 日の寒気の範囲

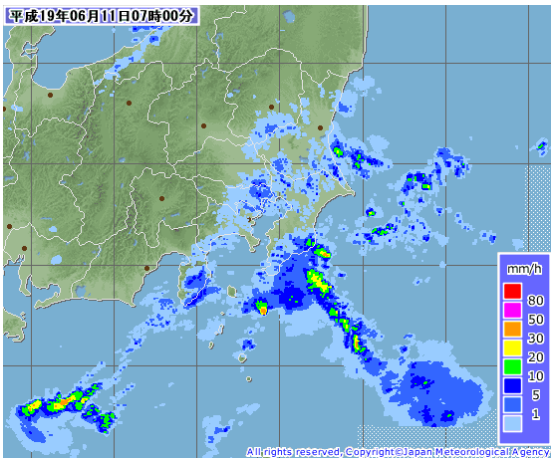

図２　6 月 11 日 6 時～7 時の解析雨量

【８月の天気予報の利用にあたって】

8 月は 9 月と並んで台風災害の多い月です。1971 年～2000 年までの 30 年間の平均では、8 月の台風の日本への接近数が 3.4 個、上陸数は 0.9 個でそれぞれ 1 年の中で最も多い月になっています。最近では 2004 年が多く、8 月の接近数は 6 個、上陸数は３個で、暴風、大雨、高潮などによる災害が全国各地で発生しました。台風が日本付近を通ると予想されている場合には、常に台風情報、注警報、天気予報などの最新の気象情報を入手して十分に警戒するようにして下さい。なお、気象庁では 19 年 4 月 8 日から 24 時間先までの進路を 3 時間きざみで予報するなど、台風情報の改善を実施しています。気象庁ホームページで改善内容を確認されることをお薦めします。